圖 わが戀わが太刀（六卷）

帝キネマ芦屋時代映畫

原作者　羽縣荷香氏
脚色者　木村一馬氏
監督者　松本英一氏
撮影者　江後岳翠氏

――主要役割――

備前吉國　阪東豐昇氏
同　國俊　明石綠郎氏
弟子左近次　片岡紅三郎氏
延次の娘早苗　柳まさ子孃
大庭鐵心　實川延笑氏

（略筋。備前吉國は東照宮献納の劍、作製を藩主より命ぜられ、一子國俊と共に日夜心膽を打ち込んで作つて居た、同職延次はこれを妬み劍客大庭鐵心をして吉國を亡きものにした。延次の娘早苗と國俊とは甘き戀の囁きに醉つて居たが父を失つた國俊は故郷も戀人をも捨てた。斯くて幾星霜は夢と流れ、宇津の山奥には晝夜の別なく太刀打つ着者こそ、世を忍ぶ若き刀匠國俊であつた。延次は悔悟の念に堪えず娘早苗と國俊との前に過去の罪を謝した。業成り戀人を得た國俊は仇敵鐵心を討ち彼が畢生の名劍は東照宮へ納められた。）

題名ほどの好さは持つて居ないが、骨組は相當しつかりした映畫である。物語も松本英一氏に向くもの故氏の時代映畫の處女作「龍卷く嵐」より優れて居る個所が多い。然し決して松本英一氏の本當のうまさは矢張り見出せなかつた、それは時代映畫そのものが氏には不向である事に因をなして居るゝ思ふ。興行價値を考慮する爲めの亂闘の挿入がこの物語を可成りに殺伐化して居る。もし氏が時代映畫としての興行價値を無視して製作したならば氏の味をこれ以上出し得たであらうに惜しいものである。明石綠郎氏の國俊は少々無理な役ではあるが、流石に好意を持てる程度にこなして居た。柳まさ子綠の早苗は所謂可も不可もなし程度の出來である。加茂以來久し振りの江後岳翠氏の撮影は老巧である。――山本綠葉――

興行價値――充分とりになる價値がある。題名は上品だが興行價値方面も優れて居るから何處の館にも向く映畫である。（壹月廿八日神戸相生座）